愛知教育大学研究報告，49（教育科学編），pp. 183～191, March, 2000

Facilitated Communication の妥当性に関する研究(3)

―重い知的障害をともなう自閉症の世界と FC 現象―

神　野　秀　雄
（障害児治療教育センター）

An Investigation of the Validity of Facilitated Communication (3)

Hideo JINNO
(Center of Remedial Education)

I．は　じ　め　に

筆者は，愛知教育大学附属障害児治療教育センターで主としてプレイセラピィを基盤とした方法で自閉症児の発達援助を実践してきた。自閉症は極めて多彩な状態像を示し，多様な発達経過を示すので筆者(1989)は，幼児期・児童期の自閉症児の発達経過を５つのタイプに整理し類型化した。

プレイルームで示すＤ１型の臨床像は，水遊びやトランポリン等の感覚・運動的遊びを好み，音声言語もほとんど獲得されていない。多動および強迫的な同一性保持行動が顕著である。Ｄ２型の臨床像は，Ｄ１型と類似しているが，音声言語を獲得しているものの，会話の機能を果しておらず，エコラリアを特徴とする。Ｄ３型は，質問嗜好現象が顕著に示される。Ｄ４型は，情緒発達および自閉的知能（特異な知能構造）の問題が前景に出てくる。高機能自閉症といわれる一群が含まれてくる。Ｄ５型は IQ が非常に高いが，共感性が問題となるアスペルガー症候群が中心となる。

これらの５つのタイプを認知能力・IQ という視点でみれば，Ｄ１～２型は，重度ないし中度の知的障害を伴っている。Ｄ３型は IQ 50前後が多く，いわゆるサヴァン症候群の多くが含まれてくる。例えば絵画の領域で有名なイギリスに住む黒人青年である Stephen Wiltshire は IQ 52と記載されている（1991）。Ｄ４型は，軽度から IQ 100ぐらいまで含まれ，いわゆる高機能自閉症といわれる一群が含まれてくる。Ｄ５型は IQ 100を越える高い知能を示す事例が多く，わが国でもよく知られている Temple Grandin は，現在（52歳）米国のコロラド州立大学の助教授をしており，最も成功した人として有名であるが，高校時代の WISC 知能検査では，およそ IQ 130であった（1992）。

筆者は，20年以上にわたって本センターで自閉症の治療教育に携わってきたが，最も多くを占めるのが，重度ないし中度の精神遅滞を伴うＤ１～２型のタイプの自閉症である。幼児期から児童期にかけて多動を示すが，およそ10歳頃までにはおさまってくる。彼らの特徴は，なんといっても強いこだわり（同一性保持）であろう。喜多（1991）は，同一性保持症状を①変化への抵抗，②特定の対象に対する固執，③様々なステレオタイプな行動の３つに分類したが，これらのこだわりが長期にわたって持続するのである。対人関係面では，ことばを獲得するＤ２型では，簡単な要求言語はみられるようになってくるが，話しかけられるとエコラリアになってしまう場合が多い。このような臨床像・行動特徴を示すＤ１～２型では，知能検査を実施することは困難な場合が多く，推定 IQ は重度あるいは中度となるであろう。

ところが1990年頃よりアメリカでは，Biklen, D の指導のもとで Facilitated Communication（以下 FC）が大流行し，瞬く間にアメリカの多くの州で実践されるようになっていった。筆者の類型でいえばＤ１～２型の重度な知的障害を伴う自閉症児・者が，literacy skills をもっており，“intelligent”であり，知的障害は社会的産物であり，みかけ上のことにすぎないという主張なのである（Biklen & Duchan, 1994）。

筆者自身これまで FC 現象を示す２人の自閉症児と会ってきた。Ｇ君は母親が Facilitator の時，Ｙ子さんは，特殊学級の担任教師が Facilitator の時にのみ literacy skill を発揮するのであった。この２人に出会って以来，筆者は FC 現象にとても関心をいだき，その妥当性について検討してきた(神野，1996，1998，1999)。

筆者は，およそ25年ほど自閉症児とかかわってきたが，FC 現象を示す子どもに最初に出会ったのは，わずか７～８年前のことである。しかしながら，これまでの数年間の研究で筆者は，「FC 現象は極めて稀な事態ではなく，かなり popular な現象として捉えるべきではないか」と思うようになったのである。そもそも最近10年間の欧米での流行のきっかけをつくったのは，オーストラリアのメルボルンの施設で働いていた Rosemary Crossley であり，1985年頃より自閉症児に FC を実践し始めている。そして Crossley と親交のあった Biklen がアメリカのニューヨーク州のシラキュース地域で FC の実践を始めたのが1989年であった。さらに歴史を逆上れば，わが国では若林が「書字

によるコミュニケーションが可能となった幼児自閉症の1例」を1973年に発表し，アメリカではOppenheimが1974年に“Effective teaching methods for autistic children”というタイトルの本を出版しており，これらの内容は，現在でいうところのFCに関するものであった。およそ30年前にFCに関する研究が日本とアメリカでほぼ同時に発表されていたのである。また特殊学級や養護学校に勤務する教員を対象としてFCに関する調査をしたところ，特に母親がFacilitatorとなり，FC現象を生起させた事例が少なからず報告された(神野，1998)。このように自閉症児に対する教育が始まった頃より我々は気づかなかっただけであるが，FC現象が起きていると考えるのが素直な見方と思われる。

次の問題としてFC現象をどう捉えるのか，どのように評価するのか，まさに妥当性の問題である。ほとんどのnon-vervalな自閉症児がFCを通して文章を産出することからBiklenらは，自閉症児はintelligentであり，発達性失行症によって自発的にタイプできないだけであると主張するのである。重度や最重度の精神遅滞を伴うD1～2型の自閉症児が，内面では正常な知能を有しており，健康なパーソナリティを保持しintelligentと考えてよいのであろうか。現実にみせる彼らの姿はあまりにも無力であり，周りのサポートを必要とするのである。筆者が報告したY子さんは，通常のビネー検査ではIQ 30であったが，FCを通して同じビネー検査を実施するとIQ 91の成績を示したのである（神野，1999)。産出された文章をみるとIQ 91は納得できるのであるが，日常の生活場面でみせる姿は，まさにIQ 30なのである。この落差をどのように埋めたらよいのか。どう理解したらよいのであろうか。この点に筆者は極めて関心をもつのであるが，単純に発達性失行症として筆者は理解できない。おそらく自閉症の様々な特徴を理解したうえで自閉症の精神(心)の構造を考察しなければならないであろう。

筆者は，先の論文で（神野，1999）Y子さんの経過を検討し次のように述べた。

『FC現象は，Pseudoの世界と思われる。しかしながら何故その現象が現れてくるのか，その心理機制を明確にすることによって自閉症の本態により近づくことができると思われる。FC現象を理解するためには，次の要因が複雑に絡んでいるであろう。

①知的（IQ）には，重度，最重度であること。

②人に全く関心を向けようとしない自閉症児には，そもそもFCを遂行することは困難であり，人に関心を向け，発達レベルからすれば前共生期にある自閉症児（者）であること。

③FCをスタートする段階においては，Facilitatorと自閉症児の間に濃厚な関係が成立していること。

④身体と身体によるコミュニケーションが最もドミナントに機能する時期は赤ちゃん時代であり，FCを通して活発なコミュニケーションがなされ，その中心的防衛機制は，投影と取り入れであること。

⑤自閉症児の凄い記憶力がFC現象が惹起されるためには深く関与していること。

⑥自閉症児の示すpassivity(他者の意図に従ってしか動けないこと)が，FC現象に重要な役割を果していること。』

以上のように述べたが，本論文においては，FC現象に関わるこれらの要因について更に考えてみたい。

II．FC現象を示すある事例

次に示す事例は，筆者がFC現象に初めて出会う契機となった自閉症児である。様々な事情により約半年にわたり筆者がセラピストととして合計10回のプレイのセッションをもったにすぎなかったが，プレイの経過や母親によって語られたFCに関するエピソードを示し，本事例の特徴について考えてみたい。

1．事例の概要

事例　G君。男子。インテイク時9歳4ヵ月。小3（特殊学級在籍）

主訴

①自閉傾向が強い。他人の腕に噛みついたり，時に頭突きもする。自分の掌を噛む。②機械器具，スイッチ，照明器具あらゆる物に手を出す。③多動であり，セルフコントロール，集団生活ができない。④言語が極端に少ない。⑤精神不安で異常に物事にこだわる。

生育歴

妊娠中は特に異常なし。満9ヵ月で出産。3080g。帝王切開。保育器に1週間程度入っていた。這い始めは6ヵ月。歩き始めは11ヵ月。かたことは1歳2ヵ月で，ママなど言い始めた。

2．プレイセラピーの経過

#1（6月15日）

母親より先に一人で玄関に来て，面接室に入りこみ換気扇のスイッチをつけたり，止めたりして，換気扇をじっと見つめている。まもなくして隣の面接室にも入り同じことをしている。大プレイルームに行くと，すぐ天井扇のスイッチをつけたり，止めたりしながら見つめている。電気のスイッチもつけたり消したりしている。その後トランポリンの上に小さなブロックをばらまいて跳んでいる。まもなくして外に出てアスレチックの方に行き3つの滑り台をゆっくり滑った。急に大学会館の方に向かって走りだす。Thに追いかけられることを楽しんでいるようで，時々立ち止まってThをじっと見たり，少し笑みを浮かべて走っている。大プレイルームに戻ると，またスイッチをいじっている。突然走りだして玄関の隣の事務室に入っていったのでプレイルームまで連れ戻す。暑くなってきたようでシャツを脱ぎ捨て上半身裸で外のプールに行く。

サッとズボンとパンツを脱ぎ，全裸でプールの中にある滑り台を繰り返し滑っていた。また温水プールにも入り，水を出したり，栓を抜いたりを繰り返しやっていた。時間がきて玄関に戻り，母親に服を着せてもらう。Cl は，側にいる Th のところに来てじっと見つめる。そして急に Th の左腕を噛もうとした。Th は避けず，どの程度噛むのかも知りたくて噛ませたところ，腕に歯形が残ってしまった。次に Th のお腹をめざして Cl は噛もうとしたのでThは逃げた。

#2（6月24日）

前回のように天井扇やアスレチックで遊び，その後外のプールにやってくる。プールには水が入っておらず，Th が元栓を一杯にひねり水を出す。Cl はもっと水が早く溜まるように Th の手を元栓のところに持っていき（もっと水を出せと）要求してくるが，無理な要求である。その時 Cl は Th に頭突きを突然にしてくる。これはとても痛かった。水が次第に溜まってくると水の中で行ったり来たり，飛び跳ねたりしている。特に滑り台を好んでしていた。Th は Cl をじっと見守るだけである。一度だけ水を Cl にバケツでかけたら，ニコッとした程度である。Cl は，penis に触れることが多い。触れるというより両手で penis を弄ぶ感じである。また2～3回プールの中でオシッコをしてしまう。その時は Th の顔を瞬間的に見るが。また突然不穏な感じになり左手の小指の下あたりを噛んでいた。Cl の掌のその部分はタコができていた。

#3（7月6日）

天井扇そして外のプールというパターンになってきた。このセッションでは横目で何かを見ることが多かった。Cl は首を45度ぐらいまげて正面の物を見るのである。時間がきても Cl はなかなか帰ろうとしない。Th が Cl の腕をもって玄関に戻ろうとしたら Cl は Th の腕を噛もうとしたり，メガネをとろうとしたり，Cl の方から激しく Th に攻撃をかけてきた。凄いエネルギーをもっている Cl である。

#4（7月13日）

このセッションでは温水プールが中心の遊びの場となった。大半の時間は水の中を行ったり来たりしていた。このセッションでは横目で Th を見ることが多かった。Th はプールの縁に座っている。3メートルほど離れた所から Th を横目で見る。そのうちに Th の横に来て，ちょこんと腰掛けるのである。しかしすぐ降りてしまう。このようなエピソードが3回あった。また Cl はお湯のでている蛇口を閉めたり開けたりを繰り返していた。Th が「お湯，とめるの？」と聞くと，Cl は「お湯，とめるの」と初めてエコラリアがみられた。

#5（7月20日）

天井扇，換気扇，プール遊びが中心であり，横目も頻繁に見られた。

#6（7月27日）

今日は気温が高く，室内プールで遊ぶ。Cl は栓をして水をだす。水が溜まってくると心の底から喜びが沸き上がってくるような笑顔を示す。かなり水が溜まってくると Cl は室内にあるオモチャ棚に初めて気づいたかのごとく，水鉄砲をとり，自分の口に向けて水を飛ばしている。まもなくオモチャをプールの中に投げ込んでいき，結局全部のオモチャを投げ入れてしまった。時間がきて Th が水道の蛇口を閉めたら Cl は Th に激しく頭突きをしてきた。予期していなかったのでまともにくらい非常に痛かった。さらに Cl は襲ってきたので Th は逃げると Cl は壁に向かって頭突きを3～4回し，それでおさまったようだ。

#7（9月14日）

このセッションでは，ホースを使った遊びが中心であった。室内プールからホースを外のプールまで持っていき，プールの周りのタイルが少しずつ水に濡れていくのをじっと見つめている。あたり一面濡れてくると，他の場所に移動して濡らしていく。Cl は床に這うような姿勢で水が広がっていくのを見つめている。特にコンクリートの廊下が濡れていく様子を見つめる一途な姿は印象的であった。

#8（9月21日）

室内プールには水が入ってない。Cl はまず栓をして水を出す。水がプールの中を流れていくのを見つめる。水が少し溜まってくると水の流れがなくなってしまうので，ホースを持って外のプールの周りに行く。ホースの水がタイルの溝を流れていく様子を見つめている。場所を変えては溝に流れる水を見つめていた。このセッションでは童謡を口ずさんでいたが（「おーてて，つないで，の一みちをゆけば…」）外国人が歌うような感じがした。帰りには初めて「シャヨウナラ」と言って帰っていった。

#9（9月28日）

ホースの先から水が流れ，ヒタヒタとコンクリートの床が濡れていく様を見つめる Cl であった。後半は温水プールに飛び込んだり，行ったり来たり，走り回ったりして激しい動きをしていた。Th に関心を示すこともないように思われた。

#10（10月5日）最終回

来所すると第1プレイルームに入り，天井扇のスイッチをつける。そして観察室に入り one side mirror から天井扇を見つめている。すぐに大プレイルームに走っていき天井扇をつけるが，また走り出して事務室に入る。Th は Cl を連れだすと再び大プレイルームに戻り天井扇のスイッチをつけたり，止めたりして天井の扇風機を見つめている。風のごとく動くというより，光のような猛スピードで動く Cl であった。そして温水プールに入り，水の流れを見つめていた。水が溜まってくると，以前のセッションであったようにオモチャ

を全てプールの中に投げ入れる。そして Cl はプールの中に入り，2つのオモチャの船をくっつけたり，離したりを繰り返しやっていた。ボイラー室に入りコンクリートの床にオシッコをしたり，水をまいたりペットボトルにオシッコを入れ，濡れていない床にまいたりしていた。時間がきたので Cl を脱衣室に連れていく。Cl は水泳パンツを脱ぐ。Th は Cl の身体をバスタオルでふいてやっていると，Cl は Th の身体にまきついてきた。ダッコしてほしい姿勢であったので抱っこすると，Cl は Th の頬に自分の頬をくっつけてきた。そして Th のメガネを Cl は取り，メガネのツルを口の中に入れていた。しばらく抱っこしていたが，まもなく Cl を下ろして服を着させるが両手を Th の首の周りにまきつけてくるので Th は再び Cl を抱っこすると Cl はまた頬をくっつけてきた。

3．Facilitated Communication について

①インテイク時に母親は Cl のテスト用紙を持って来られた。小1～2の頃は普通学級に在籍しており，その時受けたテストである。国語と算数のテスト用紙であったが殆ど100点であった。日記にも沢山の文章が書かれてあり，母の日の手紙には「ぼくは，がんばる…」と何度も書いてあった。筆者にはとても Cl が書いたものとは信じられなかった。母親もいろいろな治療機関でこれらの資料を見せるが，信じてもらえなかったと言われる。母親が Cl の肘とか身体の一部を触っていると，日記を書いたり，テストを受けたりするそうである。最近では「パパが好き，○○ちゃんがうらやましい」と書くそうである。

Cl はよほどのことがないと喋らない。まれに「とって」とか「ほしい」と言うとのこと。現在では，殆ど母親がサポートして筆談によるコミュニケーションをしていると母親は言われる。

②#5：母親は Cl の書いた日記をもってこられた。その日記をみると「学校，かわりたい」「こわい」「イエスキリストさま，たすけて下さい」などいろいろ書いてあった。「しずおかは，しずかです」とシャレ（？）も書いてあって笑えてしまった。

③#8：母親は「水で遊びたい，面白い」と Cl は自宅で書き，プレイを楽しみにしていると言われる。また学校では「一人だと怖いので，お母さんに来てほしい」と書くそうである。

④#10：K病院で投薬（セレネース）を受けている。Cl は「薬を飲むとよけいに落ちつかない，薬は僕にあわない」と書くとのこと。Cl は週1回スイミングに通っているが，勝手に動いている。母親は「どうして，そんなことばかりやるの」と Cl に注意すると「神野先生が，当分好きなようにやらせておきなさいと言った」と Cl は書いたそうだ。以前のセッションでの母親と筆者の会話を側で Cl は聞いていた場面は確かにあったが。

4．まとめ

本事例・G君は，筆者にとって極めて衝撃的な自閉症であった。G君は，極めて多動であり，換気扇や扇風機等のスイッチ類を探し求める時は，風のごとくというより光のごとく動き回るのであった。比較的動かない時は，水遊びであるが，床を水がヒタヒタと流れる様を屈んでじっと見つめる姿が印象的であり，筆者の記憶に深く刻まれている。

話しことばは，ほとんど聞かれることはなく，一度だけオーム返しがあったのみであり，本当にかかわりの難しいG君であった。G君からの筆者へのかかわりは，横目で筆者をチラチラ見たり，プレイの終了の時などの欲求不満状態の時，筆者を噛んだり，頭突きをしたりするなどの攻撃的な行動であった。思うように筆者に攻撃できない時は，壁に頭をぶつけたり，自分の掌を激しく噛むのであった。

イメージ的には，鎧兜に身を固め，一人孤立して大勢の敵と戦う戦士のごときである。こちらが親愛の情を示しても，それを被害的にしか受け取れず，G君は，これまで信頼できる人と出会ってきていないような感じがしてしまうのである。

このG君が上述してきたように母親が Facilitator の時，手首や肘をサポートするとテストでは，殆ど満点に近い点数をとり，年齢相応な日記や作文をかくのである。G君に通常の知能検査を実施することは困難と思われるが，推定 IQ は重度とか最重度ということになろう。重度の知的障害をもつG君が，予想できない読み書き能力を発揮するのが FC 現象であり，不思議としかいいようがないのであるが，そればかり言っておられない。何故 FC 現象がおきるのか？。

III．重い知的障害を伴う自閉症の世界

FC 現象を理解するために，一般的な重度な知的障害を伴う自閉症児の世界を理解する必要があると思う。筆者の類型でいえばD1型およびD2型が該当するが，彼らは漸進的な発達を示すもののこだわりが強く，音声言語のある事例ではエコラリアを特徴とする。また特に最重度と思われる音声言語をもたない事例では思春期の頃よりカタトニア（catatonia）のような状態を一時的に示すものもいる。これらの特徴を示す事例を紹介しながら彼らの世界を考えてみたい。

1．反響の世界（事例A）

次に示すある自閉症児は，3歳頃より養護学校高等部を卒業するまで約16年にわたりプレイを実施した事例である（神野，1993）。4歳頃より色名（カラーボックス並べ），平仮名，アルファベット，数字（積木並べ）の世界に関心を向け，文字を読むことに関しては著しく広がっていった。しかし文字は読めても意味・概念を獲得されているようには思われなかった。6歳頃よ

り Cl 自身，CM などによく出てくる商品名などを書くこともできるようになっていった。以下プレイセラピィ中にClが示したClの発話やエコラリアの代表的なエピソードをあげてみたい。

3歳

①プレイ中ThがClの名前をよぶと，「○○チャン」とエコラリアする。

②Th が積木をとって〈あ〉と読むと，「ア」とエコーする。大きな積木で Cl はお家のようなものを作るので〈お家？〉と尋ねると，Cl は，「オウチーヲキイテモワカラナイ」と童謡の一節を歌う。

③Cl は，カラーボックスを並べながら明瞭な発声で「アカ／ムラサキ／キイ」などと言う。

4歳

④この頃になると Cl は，積木の平仮名，数字，アルファベットが自力で読めるようになる。

5歳

⑤Cl が積木を読んでいく。例えば Cl が「リンゴ」と読むと，Th は〈うん，りんごだね〉と応答する。Th が黙っていると Cl は，「リス，ウン，リスカ」「アリ，ウン，アリカ」と Th の応答の部分まで喋っていく。

⑥〈プレイルームに行こう〉「イコウ」，〈ボックス持ってって〉「モッテッテ」，〈もう，終わろうか〉「オワロウカ」といったエコラリアがみられるようになってきた。

小1（養護学校小学部）

⑦Cl はカスタネットが描いてある積木を Th にみせる。Cl がその名前を忘れてしまい Th に尋ねている場面である。〈なんだったっけ〉と言うと，「ナンダッタケ」とエコーしてしまう。

⑧積木遊びを終えて Cl が立ち上がる時，「ヨイショ」と言う。これは Th が立ち上がる時に無意識に発していることばである。

小2

⑨Th がペンでボードに〈きょうは木曜日，あすは何曜日ですか〉と書くと，スラスラと読んでいくが，Th の質問には応えてくれない。

⑩Cl は海に浮かぶ船の積木を見せながら「ウミ」という。〈あー，船だね〉と言うと，「アフネ」と言う。

⑪Cl は滑り台で足を強くうってしまう。「ゴメンナサイ，ゴメンナサイ」と繰り返して言う。

⑫この頃クリームパンにこっている。プレイ終了後に「オカアサン，パン，タベタイ」と適切に母親に向けて言う。

小3

⑬モーターボートの描いてある積木を見つけると「オトウサン　オカアサンヲタイセツニシヨウ」と言う。

⑭Cl はプールで遊びたい時，小声で「プノツクジ（プのつく字）」と言う。〈プール〉と応えると本当に嬉しそうな表情をする。

小4

⑮プールで遊ぶ時，水泳パンツをはくことを嫌う。〈パンツはく？〉と聞くと，「パンツ　ハカナイ　イラナイ」と適切に言う。

⑯プレイが終わり帰る時，「バイバイ」と言って手をふる。しかし掌は Cl 自身の方に向けられている。母親が Cl の肘のあたりに触れて，掌の向きを変えようとするが，その意味が分からないようで，今度は自分の左手で母親の触れた右手の肘のあたりを触れている。

小4の頃までの発話をあげてきたが，Cl の発話は，順番型発話のエコラリアが最も多いが，肯定的ニュアンスの強いエコラリアや場面関連型発話もみられる。極めて稀にではあるが適切な要求や応答もみられた。

また Cl は，テレビやラジオで放送される CM を沢山覚えており，プレイ中に独り言のように喋ったり，ホワイトボードに商品名を次々と書いていくのである。特に小学部の高学年の頃は，商品名をボードによく書き，殆ど無限といっていいくらい商品の名前がでてきた。本当に凄い記憶量だと驚いてしまう。またある時母親が一枚のカレンダーを持参された。これは1年前のカレンダーであるが，それに「ラーメン」「もちつき」「はいしゃさん」等いろいろ書かれてある。Cl は一年前にあった出来事を思い出し書いたのである。母親は，それが本当かどうか分からないが，歯医者の診察券が残っていたので確かめてみると全て正しかったので本当にびっくりしたと言われていた。

待合室にある「オレンジページ」などの本をスラスラ読んでしまう Cl であるが，会話は困難であり，話しかけられるとエコラリアがドミナントになってしまう。本当に「ことば」にとりつかれたように関心を示し，ことばの世界につかりながらも，ことばによって世界を切り開き，意味のある世界を創造することは困難であった。ラジオやテレビのコマーシャルが耳から入り，それが大量に記憶されている。その聴覚映像をそのまま音声化し，あるいは視覚的映像を音声化する。ことばが意味するものと意味されるものに殆ど分化していない。他者に話しかけられれば，turn-taking 的にエコーすることになってしまう。

中学部の頃，あるセッションで Cl は室内の温水プールと外のプールの真ん中で立ち止まってしまう。Th は〈どっちのプールで遊ぶの？〉〈好きな方でいいよ〉〈外のプール？〉などと言うが，全て Cl はエコラリアしてしまうのである。Cl はその頃は，よく外のプールで遊んでおり，明らかに外プールで遊びたかったと思われるが，その意志を Th に表明することができない。また高等部の頃の自宅でのエピソードであるが，Cl は弟と一緒に熱いお風呂に入った。弟は先に出てきた。弟は母親に「お兄ちゃん，死ぬよ」と言った。

Clは弟に「お湯にはいっとりなさい」と指示されると，たとえ熱くともいつまでも入っているそうである。この例は極端かもしれないが，Clは本当に主体的に能動的に動くことができず，極めてpassiveな生き方なのである。⑭のエピソードのようなことは極めて稀なことであり，この時は，Thにかろうじて聞くことができるくらいの小声で「プのつく字」と気持ちを伝えたのである。筆者はこのようにことばでClが自己表明したことに驚くと同時に，つくづく自閉症児が他者に何かを伝達することの大変さを感じたのである。自閉症は，それなりの自己が形成されているが，日常の対人的世界では，あまりにも自己が脆弱なため，その自己が見えてこない感じがしてしまうのである。本事例の場合は，とりあえず反響の世界に身をおき，その自己を防衛している感じがしてしまう。⑭のバイバイの掌の向きのエピソードは自閉症にみられるポピュラーな現象であるが，これは反響行動といっていいかもしれない。音声も行動も反響してしまうのである。

本事例は外界にひどく関心を示し，視覚，聴覚を通して入ってくる膨大な情報を記憶し，貯蔵している。しかしその記憶は，生のままの姿であり，Clの自己を通して意味のある世界に変形や加工されることはない。他者からの働きかけに対しては反響によって応え，きわめてpassiveに対応している。稀に自己を主張するが，筆者にとってその脆弱な自己をどのように捉え，記述するかは難しい課題である。

なお本事例は，身体に触れられことをひどく嫌がっていた。プレイルームに行く時，ThがClと手をつなごうとしても振り払われたり，トランポリンを跳ぶ時でも，手をつないで跳ぶことはなかった。一貫して身体接触を拒否していた。おそらく身体に触れられると，ひどく侵入された感じを抱いたり，脆弱な自己が破壊されそうな被害的感覚に襲われるのであろう。

身体を通したコミュニケーションがおそらく人間にとって最初の経験であり，赤ちゃんは母親に抱かれることによって人間に対する信頼感，安全感が育つのであろう。抱かれながら視線を合わせ，母親がいろいろ語りかける体験は，赤ちゃんにとって必須体験であろう。この情動的コミュニケーションを通して共通の感覚が得られると思うのである。共通感覚が身についていない場合，おそらくことばの世界（象徴機能）に入ることは困難であり，意味不明のまま記憶されたり，反響の世界に留まることになろう。

2．こだわり・強迫的行為・catatoniaの世界（事例B）

次に示す事例は，筆者が丁度13年間（小1より19歳まで）にわたってプレイを実施してきたある自閉症児の経過の概要である（神野，1992）。初来所時，母方祖母も一緒にこられたが，祖母は，「生まれた時，この子は賢そうな顔つきをしていた。もう一人の孫も一週間違いで生まれた。その子は変な顔をしていた。この子の成長を楽しみにしていたが，歩き始める頃には逆転してしまった。歩くのも遅いし，私の家系にはこんな子はいないし，どうしてこんな子になっちゃったんだろう」と述べられたのが印象的であった。

本論文ではプレイの経過の要約を述べてみよう。

Ⅰ期：小1（普通学級）～小2（特殊学級）

小1の夏頃までは主体的な動きはpoorであり，刀の鞘などの棒状のもので頻繁に奇声をあげながら床を叩く。秋頃より抱っこやくすぐられたりすることでpositive feelingを体験できるようになっていった。小2になると人形を壊すことが一時期みられたが，その後活動性が高まり，よく喋り，よく動いたが，同時に不眠も始まった。

Ⅱ期：小3～小4

この頃より家庭では母親に追いかけられる遊びを楽しんだり，プレイ場面ではThに背負われ，「あっち（へ行け）」とか「こっち（へ行け）」とかThを指示して楽しそうであった。ことばのやりとりも増えたが，同時にエコラリアも顕著にみられた。小4になると一層Thとの関係は深まり，甘え的な身体接触も増えてきた。Clも「いらない／眠たい／ここ登る／降りれない」などClの意志を表明することばがよく聞かれるようになった。この期が最も主体的，能動的に動いたように思われた。

Ⅲ期：小5（4月）～小6（8月）

小5になると遊びのパターン・順序が固定化し，Thに足の裏を掻いてもらったり，トランポリンを跳んでもらったりする受け身的な感覚を楽しんでいた。秋頃より性器いじりや唾吐きが時々みられた。小6の4月の修学旅行を契機として不眠が続くようになった。

Ⅳ期：小6（9月）～中1（養護学校・11月）

小6の秋頃よりプレイの時間が短くなり，強迫行為が出現してきた。特に靴を脱いだり，衣服の着脱に時間がかかった。ドアの開閉もひどく気にしていた。不眠が続いている。

Ⅴ期：中1（12月）～中2（1月）

プレイの時間は短くなり，主体的な動きはpoorになっていった。そのためにかこだわりも減ってきたと母親は言われる。中2の5月や7月では蠟人形のようなClであり，身体も固くカタレプシー的状態になってしまった。この極限状態から脱したのは秋頃からであり，再び強迫的，儀式的行為が目立ってきた。

Ⅵ期：中2（2月）～中3

プレイルームに入らなくなり，待合室で時間を過ごすが，15分ほどで帰ることが多かった。

Ⅶ期：作業所に通う4年間

来所すると待合室に入り，Clの足の裏を掻いているうちに眠ってしまう。最初の2年間は熟睡することが

多かったが，後半の２年間は家庭での不眠状況が続き，来所しても眠れないことが多かった。

以上のような経過を経てきた。本事例は小１の頃より棒や自分の掌で床を叩く行為が顕著にみられたが，一方ではトランポリンや水遊びを好んでしていた。そのようなプレイの中で次第に Th とのコンタクトが増えていった。小３の頃よりエコラリアが頻繁にみられるようになり小４の頃，要求語も多く聞かれ(「降りれない／あっちへ行きたい／もっとやるの／等」)，最も健康的な動きを示した。

その後は主体的，能動的な動きが弱まっていき，小６の頃より強迫的行動が目立ってきた。例えば来所して玄関で靴からスリッパにはきかえるのだが，靴を脱いだり履いたりを何度も繰り返すのである。そして靴を脱いだ後，今度は靴の裏側を何度も触れている。そしてきちんと靴を揃えることを繰り返している。次は靴下を脱いで，それを Th のポケットにつっこむのである。これだけの行為に随分時間がかかってしまう。プレイ場面でも掌でひどく床を叩き続けたり，CM を喋り続けたり，性器いじりをしていた。

中２の１学期の頃は，強迫行為もなくなり，来所すると玄関のソファに座ったまま動かない。じっと掌を見ていたりする。プレイルームに誘うと，極めてゆっくり歩いていく。来所を重ねるたびに動きがなくなり，生気が失われていく感じである。移動するのも時間がかかり，２～３歩あるくと立ち止まり，じっとしている。顔や手足が異様に白くて，まるで蠟人形のようだ。このような状態が半年余り続いたが，catatonia の状態を脱すると再び強迫行為が出てきた。

図１は，小４の２月に描いたものである。いわゆる頭足人間であるが，しっかり塗りつぶし，生命力を感じさせる。図２は，強迫行為が目立ち始めた小６の３月の時期に描いたものであるが，顔の部分が濃く塗りつぶされ，眼や鼻の輪郭がはっきりしなくなる。足がなくなる。図３は，catatonia を脱しかけた中２の９月に描いたものであり，輪郭のみの顔であり瞳が欠けている。

図１　小４（３学期）

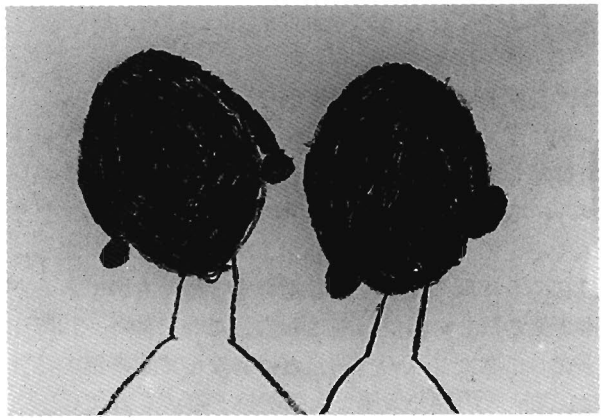

図２　小６（３学期）

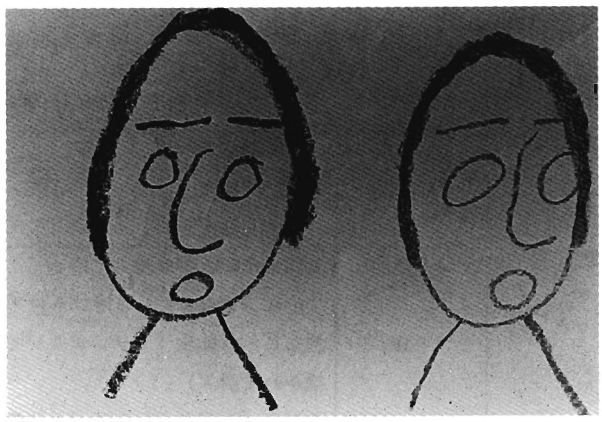

図３　中２（２学期）

本事例は中学部卒業後作業所に通うようになった。こだわりが強く，日常生活はステレオタイプな行動にひどく支配されている。こだわりが妨害されると激しいパニックになり，時には母親に暴力をふるうこともあり，様々な生活の中でおきてくる変化に柔軟に対応することが極めて困難であった。

上述してきたように本事例は，単連動（棒や掌での床たたき）が頻繁にみられ不安定であったが，しかし小１より小４になるに従って Th とのかかわりも深まり，Th に背負われながら「あっち」「こっち」と指示し，とても生き生きした体験をしていたと思われた。しかし小６の頃よりこだわり・同一性保持行動とはニュアンスを異にする強迫的行動が目立ち始めた。なぜ強迫的に行動を繰り返すのであろうか。おそらく体験そのものが，自らの主体性，能動性に基づくものだという感覚が希薄になってきたからであろう。何度も繰り返す中でやっとこれが自分自身の行為なのだという感覚（自己感）を覚えるのである。この行為の自己感すらも喪失すると catatonia の状態に陥ってしまうのであろう。本当に人間の極限状態であり，このような防衛形式でやっと生命を維持しているといえよう。

本事例は，主体的，能動的行為から強迫的行為，さらには catatonia の状態へ，そして再び強迫的行為へ推移していった。事例Ｂは，自閉症は，自己（感覚）の喪失の危機に常に晒されている存在なのだというこ

とを教えてくれた事例であった。

3．自閉的不安の世界（事例C）

次に示す事例は，筆者が10年以上にわたってプレイを継続している自閉症であり，初来所時では，単語レベルでの要求はあるが，筆者の問いかけにはエコラリアで応えており，D２型のタイプといえよう。表１は最初の６年間のプレイの経過をまとめたものである。本事例の詳しい経過は別途報告したが（神野，1997），上述してきた２人の自閉症とは異なって本事例の特徴は，Th との間で濃厚な人間関係が形成されていった点である。プレイを開始後，間もなくして Th のことを「お母さん」と呼びかけるようになり（II期），V期では，温水プールで抱っこされ，一体化・融合化のような状態に展開していった。そして Th のことを「神野先生」と呼ぶようになった頃より，特に Th を高い所から突き落とすことを始めとして攻撃的な行動が頻繁にみられるようになった。そして鏡を用いた遊びが見られるようになり，いわゆる鏡像段階に到達したのである。その後は Th にとても甘えるようになり，多様な感情がことばで表現されるようになっていった。

プレイの経過の中で特に興味深かったのは，VI期頃から２年間ほど続いた Th への攻撃的行動であった。その行為の中心は Th を高い場所から下に突き落とすことであった。Cl 自身も時には自ら高いところから落ちようとするが，どうも怖くてできないようだ。まさに Cl の感じている「落下不安」を Th に投影し，Th を突き落としては Cl 自身満足するのである。この奈

表１　６年間のプレイセラピィの経過のまとめ

期（年齢）	対人関係系	身体図式系	象徴機能・言語系	人格発達
３～４歳	自閉的孤立 筆者との出会い		（天気図へのこだわり）	自閉的不安
I（５歳） II III（６歳）	初回にTh と手を握って帰る Th に「お母さん」と呼びかける 抱っこ・一体化（トランポリンで抱かれて跳ぶ）（１）	身体像の跡形に関心 鏡像様行動をTh に要求（１）		重要な他者の発見
IV V	Th に「お父さん」と呼びかける 一体化・融合化（温水プールでholding）（２）　クレーン現象	鏡像様行動（２）		共生（前期） Basic Security の獲得
VI（７歳）	攻撃的衝動（Th を高い所から突き落とす）（１） Th を「神野先生」と呼ぶ	鏡像様行動（３）		共生（後期）
VII VIII	攻撃的衝動（２） 一体化・融合化（３）			分化期
IX（８歳） X XI	攻撃的衝動（３）	鏡の使用 ↓	絵を描く ロボットに関心	鏡像段階
XII（９歳） XIII XIV XV	少し離れると「神野先生おいで下さい」と言う・甘え・泣く・悲しみ 「蜂，こわい」と言う ↓	鏡の使用 身体のけがに過剰反応 ドロンコ遊び 〔甘え〕	絵を描く マイク，TVの音声に関心「神野先生言って下さい」	分離・個別化 （感情の分化）
XVI（10歳） XVII XVIII	「神野先生嫌い」と言う 「運命」 〔Th けがのため入院・３か月プレイお休み，父親も長期入院〕	バブル遊び	〔家庭で日記を書く〕 テレコに歌を録音 指さしの出現	（象徴機能の発達）
XIX（11歳）	「不安」			

落の底に落ちる不安こそ自閉症が抱える根源的不安・自閉的不安と筆者は実感するのである。この不安を原始的防衛機制である投影を用いて Cl 自身「安全感」を獲得していったのであった。

IV. 重い知的障害を伴う自閉症の世界と FC 現象

これまで FC 現象を示した自閉症G君と類似したタイプの3名の事例を報告してきた。筆者は最初に述べたように必ずしも明確ではないがある種の条件さえ整えば，すべての知的に重い自閉症に FC 現象は生起すると考えている。おそらく事例A，B，CもFC現象を惹起させることは可能であろう。しかしながら事例A，Bと事例Cでは，FC現象の意味が異なっていると現段階では考えている。

事例Cのプレイの経過は表1に示したが，セラピストとの間で濃厚な人間関係が展開され，near-normal な発達経過を示した。しかしながら日常生活で示す姿は，極めて自閉的色彩をおびた動きをしており，会話も困難であり，エコラリアが前景に出ている。C君の内的世界には健康な near-normal な自己が keep されており，彼の FC 現象は real な世界かもしれない。

一方もしA君，B君が FC 現象を示したとすれば，それは pseudo の世界と考えざるをえない。プレイの経過で示したようにセラピストとの間で affective contact が困難であり，対人的相互交流のないところでの人格発達はありえないからである。しかしながら彼らは，自閉的防衛を通してかろうじて自己を保持しており，一般的には感覚運動的遊びを通して自己（感覚）を確認しているといえよう。彼らはあまりにも脆弱な自己のため常に自己崩壊の危機に晒されており，catatonia の状態に陥る場合もある。

FC 現象を惹起させるために最も重要な要因として身体接触があげられるであろう。その身体接触の意味も事例Cのプレイの経過から教えられたのであるが，表1を見て分かるよう身体接触には2つの段階があり，第1段階は「一体化・融合化」といえる身体接触であり，第2段階は，鏡像段階を経過した後に現れてくる「甘え」の身体接触である。FC 現象と深くかかわっているのは第1段階の身体接触であろう。C君は，Th に抱かれて温水プールにつかるのであるが，移動する時も Th の両足に乗り自ら歩くこともせず，操り人形のように歩いたり，玩具を取る時でもクレーン現象という形で Th に取らせるのである。C君はまるで自己を喪失したかのごとく Th に絶対的に身をまかせてしまうのである。この状態は，まさに FC 状況であり，おそらく Th の意識的，無意識的な思いも Cl に投影され，Cl は automatic に取り入れているであろう。

FC 現象とは，Facilitator の意志や精神内界が，主体的自己の極めて脆弱な自閉症児の心を通して表出されたものであり，自閉症児の初期発達に身体接触を通して一般的に出現する現象であろう。しかしながら事例Cのように良好な対人関係の発達を示した後に生起してくる FC 現象は，real な世界の表出と思われる。しかしそれは極めて稀な事態であり，少数の自閉症児にしか出現してこないであろう。

本研究は，平成11年度科学研究費補助金基盤研究（C）「Facilitated Communication の妥当性に関する事例研究」（課題番号09610115）による研究成果の一部である。

引 用 文 献

Biklen, D. & Duchan, J. F. 1994 "I am intelligent": The social construction of mental retardation. Facilitated Communication Institute, Syracuse University.

Grandin, T. 1992 An inside view of autism. In Schopler, E. & Mesibov (Eds.) *High-functioning individuals with autism*. New York: Plenum.

神野秀雄　1989　自閉児の類型化と発達過程の研究　風間書房

神野秀雄　1992　思春期折れ線型の自閉児の13年間のプレイセラピィ―不眠，強迫行為，catalepsy ―治療教育学研究（愛教大治療教育センター）第13輯　1-20.

神野秀雄　1993　ある自閉児のエコラリアに関する一考察―16年間にわたるプレイセラピィを通して―治療教育学研究　第14輯　1-19.

神野秀雄　1996　自閉症と Facilitated Communication ―Authorship は誰か―　愛知教育大学研究報告（教育科学）第45輯　187-195.

神野秀雄　1997　自閉的孤立から重要な他者の発見，そして共生へ，さらに感情の分化と象徴機能の良好な発達をみせた自閉症児の6年間のプレイセラピィの過程　治療教育学研究　第18輯　1-22.

神野秀雄　1998　Facilitated Communication の妥当性に関する研究(1)―障害児教育現場からの FC に関する報告の検討―　愛知教育大学研究報告（教育科学）第47輯　187-195.

神野秀雄　1998　あるサヴァン症候群の電光石火計算―記憶と方略について―　行動科学　Vol. 37, No. 1・2, 87-95.

神野秀雄　1999　Facilitated Communication の妥当性に関する研究(2)―事例研究・FC 現象にかかわる要因の検討―　愛知教育大学研究報告（教育科学）第48輯　217-225.

喜多久美子　1991　自閉症児における同一性保持現象について　小児の精神と神経　31(2)　133-148.

Oppenheim, R. C. 1974　*Effective teaching method for autistic children*. Charles C Thomas.

若林慎一郎　1973　書字によるコミュニケーションが可能となった幼児自閉症の1例　精神神経学雑誌　第75巻　第6号　339-357.

Wiltshire, S. 1991　*Floating Cities*. Summit Books.

（平成11年9月6日受理）